

幼少年期の自伝(四)

—大岡昇平と三つの自伝—

柴 口 順 一

(帯広畜産大学文学研究室)

二〇〇二年十月三十一日受理

Memoirs of childhood(4) : Shohei Ooka and other three Memoirs

Jun'ichi SHIBAGUCHI

一

幼少年期を対象とした自伝として、これまで以下の三つを扱った。

- 和辻哲郎『自叙伝の試み』(『中央公論』、'57・1〜'60・2/中央公論社、'61・12)
 江口渙『少年時代』(『民主文学』、'71・1〜'75・1/和光堂、'75・3)
 西尾幹二『わたしの昭和史—少年篇—』(『正論』、'95・9〜'98・7/新潮社、'98・8、12)

これらの自伝を取りあげたのは、主として大岡昇平の『幼年』(『別冊潮』、'71・1 『季刊日本の将来』、'71・5〜'72・11)『少年—ある自伝の試み』(『文芸展望』、'73・4〜'75・7)との比較研究を行なうためであった。かつて、大岡昇平における歴史というテーマでいくつかの作品を論じた際に、自己の歴史としての自伝という視点からそれらを取りあげた。主として歴史記述の方法という側面からそれらを検討したのだが、その際に他の同様な自伝との比較の必要性を強く感じたのである。ここでは、とりあえず幼少年期を対象としたものとして、井上靖の『幼き日のこと』(『毎日新聞』、'72・9・11〜'73・1・31/毎日新聞社、'73・9)や『シリーズ大正っ子』(青蛙房、'76・9〜'78・9、全十冊)と銘打たれた一連の自伝を取りあげ、ごく簡単な比較を試みた。井上のは大岡のものとはほぼ同じ時期に書かれ、またかつて『蒼き狼』論争がたたかわされた相手であったという点でそれなりの意味はあった。

また、「シリーズ大正っ子」も実は大岡の影響とはいわないまでも、それがヒントになっているのではないかと思われる節があったことから、これまた無意味であったわけではない。しかし、一言でいってそれらが大岡のものと比較し得るような実質を持っていたかといえ、その点についてはどうも否定的ならざるを得なかったのである。

大岡の自伝は対象を幼少年期に限ったものであったが、そのような自伝は決して珍しいわけではなかった。というよりは、むしろひとつの型になっているといつて差しつかえない。その他の時期、たとえば青年期や壮年期、老年期だけを対象とした自伝といったものはほとんど見かけることはないからである。しかし、幼少年期を対象として大岡ほどの記述量を持つ自伝は極めて少ない。井上靖や『シリーズ大正っ子』のそれぞれの自伝も大岡のものには比べようもなかった。大岡のものと比較し得る実質を持っていなかったことも、おそらくはそのことと無関係ではないであろう。その後の記憶に比べればやはり幼少年期のそれは圧倒的に少ないのが普通であり、それほど長く書く材料を持ち合わせていないというのが一般であろう。にもかかわらず、なぜ幼少年期に限った自伝が書かれるのかということにもなるのだが、たぶん幼少年期には人々を特別な郷愁に誘う何かがあるのだろうというほかはない。あるいは、記憶していることがらがそれほど豊富ではないがゆえにその印象には強いものがあり、またいわば未知な部分への興味といったものがかきたてられるのだといえるのかもしれない。

それはさておき、幼少年期を対象として大岡のものに見合うような記述量を持つ

ものとして取りあげたのが、先の三つの自伝であった。ただ断っておけば、和辻哲郎と西尾幹二のものもとも幼少年期の自伝を意図して書かれたものではなかった。和辻の自伝はその死によってはからずもそのような形になったのであり、また西尾の自伝は続篇が予定されている。ただし、西尾のは『少年篇』という一応の区切りを持ってゐる。

大岡昇平の『幼年』『少年』との比較ということで見合うような記述量を持つものを選んだのは、とりもなおさず他に圧倒するその記述量のためのはかならない。その構想力といおうかその持続力といおうか、過去の自己について書くことに対する問題意識とその記述のあり方を検討するためには、やはりそれに匹敵するような記述量を持つものを比較対象として扱うべきであると考えたのである。だが、理由はそれではなかった。本論のもうひとつの目的は、自伝を扱う際の記述のあり方、それは方法といっても文体といつてもかまわないが、それを模索することであった。そして、それが自伝といふものの記述のあり方とどのように関わっているのかということを検討してみることであった。そのためにも、同じ幼少年期を対象とし、かつ大岡のものに匹敵する記述量を持つものを取りあげるべきであると考えたのである。それが、是非とも求められるべき前提であるとはいえないであろう。ただ、とりあえずの条件として設定してみることの意味はあるはずである。

自伝は、自己に関する実際の出来事を主な対象としている。それがどれだけ正確に、あるいはどれだけ網羅的に記述できるかは別にして、基本的には実際の出来事を記述の対象としているのである。大岡も和辻も、江口も西尾も、それぞれが自己の幼少年期を対象としていたことはいまでもない。同じ幼少年期とはいっても、それぞれが描いていた時期(期間)はむろん正確に同じではない。和辻の場合は高校(旧制)時代にまで筆が及んでいたし、江口の場合は小学校までで終わっていた。(幼)少年期を何歳までと見るかということには多少の議論があるが、いずれにしてもおおよそ幼少年期と呼べる時期が描かれていたことはまちがいない。その描かれる時期(期間)が一定程度に限定されれば、原理的に長く書けば書くほどより多くのことがらがあるいはより詳細に描かれることになるであろう。もちろん、そこには当然さまざまな意味での書き方の問題がからんでいることはいまでもない。だが、その書き方の問題も含めてやはりより長く描かれることにはちがいないのである。であるなら、その記述量も一定程度の範囲に限定することができればそのことによって、書き方の問題もより見やすくなるのではないかと考えたのである。ところで、以上のような試行錯誤を試みざるを得なかったのは、そのような研究

がほとんどなかったからにはほかならない。『幼年』『少年』と他と同様な自伝との比較ということだけではなく、たとえば幼少年期を対象とした自伝の比較研究といったことがある。要するに、大岡の自伝をどのように評価し位置付けるかということに、参照すべき研究がほぼ皆無だったのである。比較研究の必要性を強く感じたのもそのためであった。そして、そのような研究の遅れは基本的に自伝研究全体にいうことであつた。近年いくぶんの進展は見られるものの、自伝研究はなお決定的に蓄積不足であることはおおうべくもない。『幼年』『少年』と比較し得る適当な自伝がおのずから思い浮かべられるといった状況にはいまだないのである。さらにいえば、これまでの数少ない自伝研究にも飽き足らない点が多かつたということもある。そこで、これまでの日本における自伝研究について少しく検討を加えておきたい。

二

日本において、はじめて本格的な自伝研究に取り組んだのは佐伯彰一であった。佐伯はこれまでに以下の論を提出している。

- 『日本人の自伝』(『群像』、'73・1)12/講談社、'74・4)
- 『近代日本の自伝』(『群像』、'81・1)12/講談社、'82・5)
- 『批評家の自伝』(『英語青年』、'82・5)83・6/研究社、'85・4)
- 『自伝の世紀』(『群像』、'84・7)85・2、'85・5)8/講談社、'85・11)

佐伯はその他にも『自伝文学の世界』(朝日出版社、'83・11)を編纂し、また伝記についての論も書いている。四つのうち前者二つが日本の自伝を、後者二つが外国の自伝を扱っている。最初の論『日本人の自伝』において佐伯は、これまで自伝研究がほとんど行なわれてこなかったことに触れ、次のように述べている。

自伝論、自伝研究というものは、案外に乏しいのだ。ぼくの知る限り、日本人の自伝を系統的、総体的にとらえようという仕事は、ほとんどなされていなかっただけに近い。国文学者の側にも、文芸批評家の側にも、この種の作業は、どうも見当らない。思いがけぬ穴といった形で、また何かの盲点みたいに、すっぱりと抜け落ちてゐる。不思議といえば、不思議な話である。

佐伯が自伝研究に取り組みはじめた、少なくともそのひとつの動機はそのことにあった。だが、ここでのものいいには少々気になる点がなくもない。自伝研究が「案外に乏しい」といい、それが「不思議」だと述べていることがある。というのは、「乏しい」のはある意味で当然であり、「不思議」だと驚くほどのことではないとも考えられるからである。それはおそらく、自伝というものに対する全般的な認識や自伝研究のあり方ともかかわっている。佐伯は次のように述べていた。

世界に類の少ないほどの型・様式愛好のわれわれ日本人において、自伝は、どうした訳か、いまだ型化されなかつた数少ない文学的な媒体に属する。そこに、正統認知がなかなか得られず、文学史で無視されてきた所以もあるのだろうが、同時に型からはみ出し、型に流しこまれないあらがね、原鉦の手ごたえと魅力がたっぷりそなわっている。(傍点は佐伯)

われわれ日本人が、はたして「世界に類の少ないほどの型・様式愛好」の国民であるかどうかはさておき、自伝が「いまだ型化されなかつた数少ない文学的な媒体に属する」という判断は、にわかには首肯しがたい。むしろ、かなりの程度「型化」されていたのが自伝ではなかつたであろうか。すなわち、自伝は時代や書き手によってはあまり大きな変化を示さない、少なくとも新しい実験が次々と試みられるような分野ではなく、かなりの程度パターン化されていたといえるのではないかということである。したがって、「正統認知がなかなか得られず、文学史で無視されてきた所以」も佐伯のいうような点にはなく、まさにその「型化」、パターン化にあったといえるべきではなからうか。そもそも、「型化されな」ければなぜそのような扱いを受けるのが理解しがたいのである。佐伯もいうように、「型からはみ出し、型に流しこまれない」ものにこそ、「魅力がたっぷりそなわっている」のであり、そこに興味が向かわないはずはないからである。

このように、佐伯の認識には少々ずれているのではないかと思われるところがあるのだが、ずれているのはそれだけではなかつた。佐伯が「型からはみ出し、型に流しこまれない」といっているときの「型」とは、実は文字どおりの「型」あるいは「様式」のことではなかつた。佐伯がいていたのは、いってみれば「型」にははまらない「魅力」ある人生を生き、それを描いた自伝のことであつたといつて差すつかえない。「あらがね」や「原鉦」といったいい方をしていたのもたぶんその

ためである。先に見た認識のずれもむろん、そのことと無関係ではない。佐伯が実際に取りあげていたのもまさにそのような類の自伝であり、「型」や「様式」から「はみ出し」たような自伝ではなかつたのである。佐伯の論のおもしろさもまた退屈さも、その理由はそこにある。いわゆる「型」にはまらない「魅力」ある人物の自伝を次々に紹介してくれる点で佐伯の論はおもしろかつた。もちろん、佐伯一流の軽妙な語り口がそれにおおいに与っていたことはいうまでもない。それに対して、文字どおりの「型」や「様式」から「はみ出し」たような自伝が次々と取りあげられていたわけではなかつた点で退屈であつたというよりは、「型」や「様式」に関する言及がほとんどなかつたという点が退屈であつたといふべきであろう。かなりの程度パターン化されていたのが自伝であつたのであれば、そのような自伝を次々に紹介することはもとより無理な注文、とはいわないまでも過大な要求といふものであろう。佐伯の論が退屈だつたのは、「型」や「様式」に関する視点がほぼ完全に欠落していたためであつた。

佐伯の論が以上のようなところにとどまらざるを得なかつたのには、いくつかの理由が考えられる。ひとつは、ほかならぬ自伝研究の遅れである。すなわち、佐伯以前にはほとんどまとめた研究がなかつたことである。いきおい、佐伯はほとんど一からはじめなければならなかつた。そこに、十全な方法論を期待するのは少々酷であろう。二つ目は、ひとつ目のこととも当然関わるのだが、佐伯が研究をしはじめた七十年代はじめの全般的な研究水準にある。「型」や「様式」に関する視点を十分に取りこんだ論を、しかもほとんど先行研究のない分野で実現することは、当時の研究水準においては必ずしも容易なことではなかつたであろう。三つ目は、二番目の論『近代日本の自伝』で述べられているたとえば次のような主張があつた。

ぼくは、自伝を何よりも文学として読む。歴史的な資料、ドキュメントとしてよりは、まず作品として受取る。そうした「文学」的基準を、今にわかに方式化しようとは思わない。(傍点は佐伯)

「文学」的基準を「方式化」しないことが問題なのではない。そのようなことが「にわか」にできようはずもなく、またそうすることに必ずしも意味があるわけではない。問題は、「何よりも文学として読む」という点にある。佐伯がそのような点にこだわるのは、先にも見たように、自伝が「文学史で無視されてきた」からである。同じ『近代日本の自伝』では、「自伝を何とか正統的な文学ジャンルとし

て認知させたいといういわば批評家的なモチーフ」が、自伝研究に向かわせたひとつの大きな要因であったとも述べていた。そう考えたのも、「あまりに小説中心、フィクション重視といういわば小説帝国主義の趨勢」に対する不満があったからである。あまつさえ、日本の場合その小説はいわゆる私小説という側面を色濃く持っていた。佐伯のいい方でいえば、小説が「自伝化」していたのである。私小説という、日本の文学における小さくない問題を考える上でも自伝は資するところがある、というよりは是非とも視野に入れておかなければならないというわけである。

佐伯が意図していたことは理解できないわけではない。また、その主張も必ずしもまちがっていたわけではない。しかし、自伝を「正統的」かどうかはともかく、ひとつの「文学ジャンル」として認知させ「るためには、とりもなおさず一ジャンルとしての規定が必要である」というまでもない。規定ということばが大仰ならば、特徴といってもあるいは区分といってもかまわない。それはさしずめ、自己に関する実際の出来事を記したものと違ったことになるであろう。つまりは「小説」や「フィクション」ではないということである。佐伯が取りあげていたのも、むしろそのようなものであったことはいうまでもない。しかし佐伯は、「いかなる書き手による自伝も、一個の私語りとして、文学として読むというのが、ぼくたちの基本的な立場（傍点は佐伯）である」とみずからも述べていたように、結局は「一個の私語り」としてすべてを論じていたのである。つまりは、「小説」や「フィクション」における「私語り」を扱うのと同じ方法で論じていたのである。であるなら、自伝の自伝たるゆえんはいったどこに求められるのであろうか。自伝というジャンルは、あるいはジャンルとしての自伝は雲散してしまうというほかはないであろう。自伝を「一個の私語り」として読むことがあやまりなものではもちろんない。「私語り」が論じられる際に「あまりに小説中心、フィクション重視」であった実情において、それは極めて重要な視点であったといえる。しかし、自伝をひとつの「文学ジャンル」として認知させ「るためには有効ではなかった、というよりはみずからを瓦解させる行為だったのである。自己に関する実際の出来事を記すのが自伝なのであるならば、その方法、自己に関する実際の出来事を記すその方法を論じることが、何よりもまして求められるべきであろう。小説がいかに「自伝化」し、また私小説といわれるものであろうとも、その方法の点において自伝は明らかに「小説」や「フィクション」とは区別されるはずのものだからである。自伝としての方法を明らかにした上ではじめて自伝は、もし「正統な文学ジャンル」として認知させたい」のならばそれを行なう前提に立つことができるのである。仮にそれが実現されるな

らば、おそらくはそれまでの「文学ジャンル」は拡大しないしは変更を強いられることになるであろう。自伝を新たに「文学ジャンル」として認知させ「る意味もまさにそこにあるのである。

佐伯がもともと自伝に興味を引かれたのも、それが実際の出来事を記したものであったからである。自伝研究に向かわせた二つ目の大きな要因として佐伯は、「自伝を通して人生に触れ、歴史にふれたい」といういわば普遍的・人間的な願望」をあげていた。はたしてそのような願望が「普遍的・人間的」とまでいえるものかどうかはわからない。しかし、それは佐伯の実感がこもった正直なことばだったであろう。

以上、佐伯の論にやや立ち入って検討を加えてきたのは、自伝研究においてはその先駆者であると同時に、そのかなりの部分を佐伯一人が担ってきたといつてよい状態だったからにはかならない。日本だけでなく外国の自伝をも広くその対象としていた点でも、佐伯の論は特筆すべきであろう。だが反対にいえば、先にあげた四つの論のうち日本の自伝が扱われていたのははじめの二冊であり、日本の自伝に関する研究はやはりまだとば口にさしかかった程度といつてよいであろう。だが、ともあれそのとば口へまで導いた功績は多しななければならない。

佐伯が一連の自伝論を発表していたのは七十年代のはじめから八十年代のなかばにかけてであったが、そのちょうどなかごろに、中川久定『自伝の文学』(『図書』78・7・10/岩波書店、79・1)が書かれている。だが、これは日本の自伝に関するものではない。外国の自伝としてはよく取りあげられる、というよりは必ず取りあげられるといつてよい、ルソーの『告白』とスタンダールの『アンリ・ブリュラーの生涯』の二つを主に扱ったものである。個々の自伝についての指摘に見るべき点がないわけではないが、自伝研究に関する突っ込んだ議論が展開されているわけではないのは、あなたがち新書版で啓蒙的なものを意図して書かれたためばかりではないであろう。ただ、現在では翻訳が出ているが、当時未訳のフィリップ・ルジュンヌ『自伝契約』(Le pacte autobiographique, Paris, seuil, 1975)の内容をごく簡単ながらみ早く紹介している点は評価されてよいであろう。

佐伯以後の自伝論としては、保坂正康『自伝の書き方』(『新潮』、86・7・7・86/新潮社、88・7)がある。題名が示すように、これは主として実際に自伝を書くこうとする人たちのために書かれたものであるが、いわゆる作法書のような類のものではなかった。これまでのさまざまな自伝を取りあげ論じたもので、明らかにひとつの自伝論といふべきものである。作法書を期待して読んだ人はむしろ落胆するであろう。勝小吉『夢酔独言』、福沢諭吉『福翁自伝』から山口百恵『蒼い時』、長

島茂雄『燃えた、打った、走った』まで。取りあげられる自伝は膨大かつ多岐にわたっている。「テロリストたちの自画像」、「タレント自伝の素顔」、「スポーツ選手の栄光と影」、「冒険家はかく語る」、「新聞記者の哀しい自己」等々、分野(職業)別にまとめて書かれているのもひとつの工夫である。

だが、ときに見られる人の意表をつくようなものいいと、少々無遠慮とも思われる辛口の批評以外見るべき点は少なく、佐伯の論を越える新しい視点があるわけではない。たとえば保坂は、「人はなぜ自伝を書くのか。」と問い、「書きたいから」とそれと対極に立つ「書きたくないから」の二点である。」と意表をつく。なぜそういうのかという説明はむしろその説得力を持ち、自伝を書く動機の案内本質をついた指摘になっていた。あるいは次のような発言。「自伝を読み進めるうちに、すぐわかることがある。この著者は、他人の自伝を読んでいるかいないかが、はっきりと見えてしまうのである。他人の自伝を読んだことのない人の自伝は、必ずといっていいほど面白くない」と。そこまでいい切れるかどうかはいささか疑問ながら、しかしこれは自伝にしばしば見受けられる尊大さというか能天気さというか、要するに自伝における負の部分をうまく指摘したことともいえるのである。保坂は続けて、「彼らの自伝では、自分以外は、人間 ではない自分だけが血もあり、涙もある人間で、あとはロボットか人形として描かれているのだ。」と辛辣なことを吐いていた。

保坂の論から十年、最近の研究に石川美子『自伝の時間 ひとつはなぜ自伝を書くのか』(中央公論社、97・9)がある。中川久定の論と同様、これも日本の自伝を対象としたものではない。ロラン・バルト、ジッド、シャトープリアン、プルースト、スタンダール、ミシュレ等々、フランスの自伝を主な対象としている。だが、中川の場合とは異なり自伝というジャンルに関するさまざまな問題を、しかもできる限り自前の論理で展開しようとしている点で一定の評価を与えられるべきであろう。石川は自伝を大きく二つに分類する。「わたし」を問うための自伝」と、「時間」を問うための自伝」である。この一見して奇妙に思われる分類のもともとの発想は、自伝というものがもっぱら前者、すなわち「わたし」を問うための自伝」と考えられてきたことに対する疑義にあった。自伝は「わたし」を問うために書かれるだけでは決してなく、「時間」を問うため」にも書かれるというのである。いうまでもなく、ここで問題なのは後者、「時間」を問うための自伝」の方であるが、石川はそれを説明して、「失われた過去や、亡き愛するひとと過ごした時間を見出す」とする「失われた時」の探求である。」と述べている。そのようにいわれれば

納得できないことはない、というよりは当然のことであろうとも思われるのだが、しかしここで注意しなければならないのは「亡き愛するひと」という部分である。つまり、生きている人ではなく、「亡き」人といっている点である。石川は何気なくそう記していたのではない。「時間」を問うための自伝」が書かれるきっかけとなるのが、まさに「愛するひと」の死なのだと思われている。「喪に苦しむ者にとって、自伝作品を書くことほど差しせまった作業はないといってもいい。」とまで石川は述べていた。この二分法を基本として石川はさまざまな自伝を取りあげ論じているが、いうまでもなくその焦点は「時間」を問うための自伝」の方であった。その題名も示すとおり、「自伝の時間」について論じることが中心的なテーマだったからである。

石川の着想とそのテーマは決して悪くはなかった。しかし、その単純な二分法と自伝に関する全般的な認識のあり方には容認しがたいものがある。自伝を大きく二分するそのやり方は、やはりあまりにも単純にすぎるといわざるを得ない。そもそも、「わたし」を問う」とことと「時間」を問う」ことを同列に分類することが疑問であるばかりでなく、そのような分類が果たしてどれほどの意味を持つのか疑問なのである。石川も認めていたように、どのような自伝もそのいずれの側面も持っているからである。また、「愛するひと」の死によって人は自伝を書くのだという認識にもわかには首肯しがたい。もちろん、そのような場合があることを否定するのではない。自伝を書く二つの大きな動機その一方として指摘しうるかどうか疑問なのである。さらにいえば、「喪に苦しむ者にとって、自伝作品を書くことほど差しせまった作業はない」といった認識がある。これはまさに驚くべき見解というほかはない。もしそれが本当なら、世のなかには今にも増して無数の自伝が氾濫しているのではないかという皮肉もいたくなるのだが、仮に「喪に苦しむ者にとって」「差しせまった作業」があるとするならば、それはおそらく自伝ではなく、その「愛するひと」の伝記ではなからうか。

以上見てきたようなあまりにも単純な二分法と認識のずれといったことは、石川の論のいたるところに存在していた。二分法の方はひとまずおくとして、自伝に関する認識についてはたとえば次のように。

日記に物語の構造をあたえようとしてしばしばこころみられる方法は、日記を自伝のなかに挿入するというものである。

このような孤独感による物語のはじまりは、多くの自伝作品に見られるものである。

さて、自伝作家は、多くの場合、複数の自伝作品をのこしている。

いずれも信じがたい認識であるというほかはない。もしかしたらちょっとした不注意か何かの勘ちがいがいではないかと疑われなくてもないのだが、それにしてもあまりにも多くまたはなほだしいといわざるを得ない。日記が自伝のなかに挿入される場合はむろんあるが、それが「しばしばこころみられる方法」であるといえるかどうかはなほだ疑問であり、そのことが「日記に物語の構造をあたえようとして」行なわれるというのははっきりあやまりであるというべきであろう。「孤独感による物語のはじまり」、石川はそれを、「まわりに人の姿のない、他者から隔絶された状態をえがくことから作品を書きはじめ」ることもいっているが、そのようなことがやはり「多くの自伝作品に見られるもの」といえるかどうかは極めて疑問なのである。「自伝作家は、多くの場合、複数の自伝作品をのこしている」というのも同様である。「自伝作家」といういい方に少々違和感がないでもないが、それは単に自伝を書く人あるいは自伝作者という意味であり、実際「自伝作者」といういい方もしていた。複数の自伝を書く人は極めて稀であるというわけではない。しかし、「多くの場合」そうであるとはとうていいえないであろう。むしろ「多くの場合」、自伝は一度だけ書かれるというべきであろう。

以上、これまでの自伝研究についてごく簡単に検討してきたが、明らかなのはやはり自伝研究の決定的な蓄積不足であるというほかはない。中川久定や石川美子は主として外国の自伝を対象とし、佐伯彰一もまたその半分ほどがそうであったことを考えれば、日本の自伝に関する研究はまだまだ寥々たるものといわざるを得ないのである。加えて、その研究方法や問題意識のあり方にもさまざまな問題があった。そのひとつの原因もまた、研究の蓄積不足にあったといえるかもしれない。すでに指摘した佐伯や石川の認識のずれといったこともおそらくはそのことと無関係ではないであろう。

三

はじめに述べたように、大岡昇平の『幼年』『少年』を取りあげたのは、大岡昇

平における歴史というテーマを論じる文脈においてであった。すなわち、自己の歴史としての自伝という視点でそれらを捉え、主として歴史記述の方法という側面から検討したのだが、そこにはこれまでの自伝研究のあり方に対する反省の意味もあったことはいうまでもない。佐伯は「自伝を何よりも文学として読む」といつていたが、そのひそみにならっていえば、自伝を何よりも歴史記述として読もうとしたのである。また、『幼年』『少年』との比較対象として幼少年期の自伝に限ったのも、これまでの研究の蓄積不足を考慮したためでもあった。ある限定をかけることで、差しあたってはより妥当性の高い論が可能になると考えたからである。大岡のものに匹敵する記述量を持つものを選んだことにも、そのような意図がなかったわけではない。比較対象として選んだ三つの自伝も、むろん大岡の場合と同様の視点から検討しようとしたことはいうまでもない。

大岡の自伝におけるひとつの大きな特徴は、自伝執筆の理由や目的はいうに及ばず、執筆方法の説明やジャンルあるいは表現形態に関する発言をまさにみずからの自伝において行なっていたことである。中川久定がいち早く紹介していたフィリップ・ルジュンヌの『自伝契約』（花輪光監訳、水声社、'93・10）では、そのような記述を広く「自伝契約」と呼んでいたが、そのような「自伝契約」が大岡の大きな特徴だったのである。もっとも、自伝執筆の理由や目的などが述べられることはそれほど珍しいことではない。したがって、同じルジュンヌの『フランスの自伝』（法政大学出版局、'95・3）の訳者小倉孝誠がその「訳者あとがき」で述べているように、新井白石と大岡昇平が「自伝契約」のある稀な例外であるというわけではない。しかし、執筆方法の説明やジャンルあるいは表現形態に関する発言がなされることは極めて稀であった。だが、それだけではない。大岡の発言は自伝に関する極めて重要な認識を示していたばかりでなく、その認識がみずからの自伝にもさまざまな形で反映しているようなものだったのである。

大岡の発言の根幹をなすのは、ほとんど自伝批判ともいうべき徹底した自伝に対する懐疑であったといつて差しつかえない。たとえば大岡は、「想起には合理化と造話」は避けられず、「叙述の客観性」は保証できないと述べていた。ばかりでなく、自伝を書くこと自体が何よりも「快感」であることが、「叙述の客観性」を損なわずにはいけないのだとも述べていたのである。自伝を書くことがもし「生涯をもう一度生き直したい、という願望に繋がっているとすれば醜態である。」とまで大岡は述べていた。だが、それならばなぜ自伝を書くのかということにもなるのだが、一言でいえばそれは自己認識のためであると大岡は述べていた。これは自伝執筆の

理由や目的としてしばしばいわれることだが、しかし大岡はこの自己認識といったことについても懐疑を示さないではない。

一九四四年、フィリピンの駐屯地で、近い死が予想された時、私は再び自分の生涯を回想した。私は人生の道の半ばにいたわけだが、私は過去の詳細を検討して、私とはつまらない人間だ、フィリピンの山野で、無意味に死んでも惜しくない人間だ、という結論に達した。

同じ人間について、六十を過ぎて、同じ質問を発しても、結論は別になるはずはない。

恐ろしく絶望的な認識といわざるを得ない。しかし大岡がいたかったのは、過去を想起すること、過去を回想することが必ずしも意味のある充実した自己認識に至るとは限らず、またそのつど新たな自己認識に至るわけではないという、当然といえば当然のことであった。いやもっというならば、過去を想起すること、過去を回想することは必ずしも自己認識の手段にはならないということであったといつてよい。

自伝に対して極めて懐疑的な認識を持っていた大岡がみずからの自伝においてつとめて行なおうとしたのは、『幼年』の最初に述べていたように、「わたしは」「わたしの」と自己を主張する」のではなく、「渋谷という環境に埋没させつつ、自己を語る」ことであった。あるいは『少年』のはじめで述べていたように、「謙遜を旨とすること」、そして「自己を卑小化すること」も辞さないというあり方であった。

自己の自伝のあり方に対して少なからず意識的であったのは西尾幹二であった。西尾はときおり立ちどまっては、自己の回想や記述のあり方について感想を述べていた。大量の資料を用いそれらをまた大量に引用していたことや、あるいは最初に生年月日を記さなかったことなどもたぶんそのことと無関係ではないであろう。しかし、西尾の自伝は自己を前面におし出した極めて自己主張の強いものだったのである。その点では、むしろ和辻哲郎の方がはるかに自己は抑制されていたといつてよい。そして、和辻はおそらくそのことに意識的であった。それは、執筆動機を説明したやや屈折したものによくあらわれていた。和辻も自伝を書くことについてはある種のためらい、というのがいいすぎならば、あるこだわりを抱いていたのである。幼年期の記憶について、やや不可解ながらも一種懐疑的な発言をしていた

のもおそらくはそのためである。そのようなことに最も無頓着だったのは江口渙であった。江口は自伝を書くことに対して何のためらいもなかったし、また自伝に関する何の疑いもおそらくはなかったであろう。ただ、自己顕示だけは西尾と同様強かった。

だが考えてみるに、自伝とは大岡のいうように自己を何かに「埋没させ」て語ったり、変に「謙遜」をしたり、ましては「自己を卑小化」することではないのではなからうか。極端な自己主張や自己顕示はともかく、自伝とは自己について語ることであることにはちがいない。要するに、実際の自己にできるだけ近づぐべく自己を語るといのが自伝というものである。大岡が行なおうとしていたことは、ある意味では矛盾した行為だったのではなからうか。

しかしここで重要なのは、大岡が何を行なおうとしたかということではない。重要なのは、そのようなことを、しかも冒頭で述べること、述べずにはいらなかったまさにそのことにある。それほどまでに自伝というものを強く意識していたのである。加えていえばそれまでの多くの自伝に対する不満があったのである。くりかえしになるが、極端な自己主張や自己顕示を別にすれば、自伝においては自己を抑制して書く必要はないであろう。というよりは、そのようなことは大きな問題ではないのである。大岡は変に「謙遜」する必要もなければ、「自己を卑小化」する必要もなかったわけだが、それは大きな問題ではなかった。そして実際に、大岡の自伝がそのように書かれていたのかということも、疑問がないわけではないのである。大岡の自伝において重要なのもっともちがった点にある。それは、一方で述べていた「渋谷という環境に埋没させつつ、自己を語る」といういい方に関わっている。

大岡がみずからの自伝において行なっていた方法は大きく二つある。ひとつは、自伝を書くこととして住んでいた土地を訪れたときの様子、その過程をもおり交ぜて書くという、いわば紀行文的な書き方をしてきたことである。もうひとつは、当然そのことも関わるのだが、地理に関する極めて詳細な記述と地図の導入である。いずれもその方法自体は決して珍しいわけではない。だが、それを自伝の方法として、かつあくまでも自己の過去を明らかにするための手段として用いるのは決して一般的な方法ではなく、稀な例といえるであろう。前にも述べたように、自伝の書き方はかなりの程度パターン化されていたといつてよいのである。回想すること、過去の自己を語ることにそれほど多くの書き方などあるはずがないということは決してないであろう。しかし、自伝というジャンルはなぜかオーソドックスに向かう傾向があるのである。大岡は、そのような自伝におけるパターン化を

かなり画期的に打ち破っていたのである。

大岡があえてそのような方法を取ったのは、自己という実際の出来事、そしてその自己をとりまく「渋谷という環境」の実際を明らかにしようとしたからである。自己を自己たらしめているのは人を含めた「環境」といういわば非自己であるほかにない。もちろん、自己がなければ「環境」もないであろう。すなわち、それらはお互いに存立し作用し合うことによって自己は自己たり得、「環境」は「環境」たり得ているというべきであろう。そして、かなり確からしい実際としてより近づき得るのは、あるいはある程度の検証が可能なのはあえて分けていえば「環境」の方であろう。大岡も述べていたように、「想起には合理化と造話」は避けられず、困ったことにそれは「快感」にはかならない。「快感」は「叙述の客観性」を損なわずにはいけないのである。「環境」の方もむろんどれだけ「客観性」に到達できるかはわからない。しかし、当時の地図やその他さまざまな記録類や遺物等を調べることができるし、また当時のおもかげは今やとどめぬとしてもかつて住んでいた場所へ行ってみることはできる。そう考えてみると、いわゆる自己そのものに関しては実は何も無いことに気づくであろう。要するに、自己自身には記憶というものしかないのである。

できる限り「環境」を明らかにすること、そしてその「環境」と記憶とを拮抗させることによって自己という実際の出来事を明らかにすること。大岡が取っていたのはそのような方法であった。「渋谷という環境に埋没させつつ、自己を語る」とはすなわちそのようなことであった。大岡は、自伝は一人物の記憶による単なる証言であってはならないと考えたのであろう。一人の人間の証言はあくまでもひとつの証言であって、ただそれだけでは歴史記述とはいえない。大岡は自伝をあくまでも歴史記述のひとつとして捉えていたのである。大岡が選んだ方法はまさに歴史記述の、歴史記述としての自伝の方法だったのである。

地理に関する記述という点では、和辻の自伝にもかなり詳細な記述があった。地理ばかりではなく、その土地の手工業や商店について、あるいは農作業や祭といったことについても詳細に描かれていた。だが、それは自身の生まれた土地に限られていた。その執筆動機の説明からもわかるように、和辻は生まれた土地、つまりはふるさとに対する強い郷愁を持っていたのである。生まれた土地に関する地理記述を含めた詳細な記述は、その郷愁から生まれたという側面が強く、自伝全体における方法では明らかになかった。江口、西尾の自伝にはそのような記述はなかった。だが、江口と西尾の自伝には歴史記述としての自伝という観点から見れば注意

すべき点があった。それは、さまざまな資料を用いていたことである。江口は家の系図や祖先に関する記録、父親の日記や伯父の手記といったもののほかにさまざまな資料を用いていた。西尾も、林檎箱ひとつに入っていたという多種多量の資料を用いていたのである。特に西尾の場合、その林檎箱の存在なくして自伝は成立しなかったといってよいであろう。林檎箱に入っていたものは、自身の日記、作文、絵、習字、あるいは絵本、教科書、書籍に当時の雑誌や新聞、はては試験の答案や成績表といったものであった。西尾はそれらを大量に引用しながら、それらをもとに自伝を書いていたのである。

自伝においてさまざまな資料が用いられるのは珍しいことではない。大岡も多くの資料を用い、またかつて住んでいた場所を訪れ土地の人々や知人等の証言なども得ていた。和辻の場合だけはおそらくほとんど資料らしい資料は用いられていなかった。和辻の資料は要するに自己の記憶であったといってよい。多くの資料を用いた書かれた西尾の自伝は決して特殊ではなかった。だが、やや特殊だったといえるのは、かつて読んだ本や雑誌、あるいは自身の日記、作文、絵や習字、はては試験の答案や成績表といった、要するに林檎箱に一括して保存されていた類のものを資料としていたこと、しかもそれらを大量に引用していたことであった。

ところで、西尾の自伝にはいわゆる歴史的事件や当時の社会状況に関する記述が極めて多かった。西尾が用いていた資料には当時の新聞などもあったが、特にそのような資料が用いられていたためというわけではおそらくない。西尾の自伝は、いわゆる状況論という性格を強く持っていたのである。描かれていたのはおおよそ戦前から戦後の時期にあたっていた。西尾の自伝はいわば戦中論、戦後論でもあったといえるのである。江口の自伝にも歴史的事件や社会状況に関する記述は多かった。ただ、江口の場合は社会状況よりはむしろ歴史的事件の方により興味は傾いていたといえる。さらにいえば、江口が生まれる以前の事件が記されることも少なくなかった。それは、江口の自伝が祖先の記述に多くを費していたためであろう。祖先の記述の部分に当時の事件も記されていたのである。

自伝において歴史的事件や社会状況が記されるのはむろんよくあることである。それは当然、それぞれの個人に何らかの影響を及ぼさずにはいないであろう。人によってはそのことが人生と極めて密接に関わっている場合も少なくなく、また歴史的事件のまさに当事者である場合もあるであろう。しかし、歴史的事件や社会状況といったことが自伝に持ち込まれる際には、とりわけ幼少年期の自伝に持ち込まれる際には、得てして観念的ないしは抽象的になってしまいがちなのである。日常的

な日々の生活においては直接に、また直ちに影響をこうむるとは限らないし、またそれを実感するとも限らないからである。幼少年期においてはなおさらである。江口の自伝には実際、そのような意味での観念性や抽象性があったことは否定できないのである。それに対して西尾の自伝では、江口のような観念性や抽象性はひとまず回避されていたといつてよい。それが、西尾の自伝が状況論としても読めるゆえである。だがそのかわり、西尾の自伝は極めて自己主張の強いものになっていた。それは、西尾独自の状況論の主張と深く関わっていたのである。江口の自伝も自己顕示は強かった。だが江口の場合は、いわば観念性や抽象性における、あるいは日常的な生活レベルでの自己顕示であったといつてよい。

和辻の自伝には歴史的事件や社会状況に関する記述はほとんどなかった。それは、つとめて避けているのではないかと思われるほどののだが、要するに和辻の自伝は極めて日常的な日々の生活に密着したものであったのである。大岡の自伝もそのような記述は少なかった。先に述べたように、自己をとりまく「渋谷という環境」を明らかにすることが大岡の中心的な関心事だったのであり、和辻の場合とは少々ちがった意味で、やはり大岡の自伝もまた極めて日常的な生活に密着したものであったといえるのである。

このように見てくると、大岡と和辻の、そして江口と西尾との共通性が目立たないこともないのだが、むしろはっきりと異なる点がなかったわけではない。たとえば、大岡と和辻がそれぞれの父親に抱いていた感情は正反対であった。大岡は父親に対して強い反感を持っていた。その対立は自伝においてつぶさに描かれていたとおりである。それに対して和辻は、何の反感もまた不満もなかった。ただ、それは父親に対してだけではなく、家族のすべてにいえることであった。一言でいって、家族に対して和辻は実に親和的だったのである。同様に、江口と西尾の父親に対する感情もまた正反対であった。江口も父親には強い反感を抱いていた。それもまた、自伝のいたるところに記されていた。江口は、ときには少々ユーモラスとも思える書き方をする余裕もあったが、しばしばその口調は激烈を極めた。それに対して西尾は、むしろ景仰といつてよい賛辞を呈していた。それはまた、母親に対しても同様であった。

ここで、母親や兄弟姉妹あるいは祖父母等に対する感情について見てみることもできるのだが、それは割愛する。ただ、母親についてだけ一言述べておくならば、自伝を読む限りでは一般に、母親に対する反感といったことは、少なくとも父親に比べれば極めて少ないといえる。それは、四人の自伝においても例外ではなかった。

大岡は『幼年』において、「亡き母に捧げる」という献辞さえ付していたのである。それはさておき、父親に対する感情という点では反対に大岡と江口、和辻と西尾が共通していたことになるのだが、それをそれぞれの思想傾向とつなげて安易に一般化することはむしろ控えるべきであろう。

さて、それぞれの自伝が共通する、残るもうひとつのパターン、大岡と西尾、江口と和辻の自伝の共通性についても一言触れておく。江口と和辻の自伝に共通する大きな特徴といえるのは、自伝のはじめに祖先や一族に関するかなり長い記述があったことである。特に江口の場合は全体の三分の一、原稿用紙にして五〇〇枚を越す長大なものであった。大岡と西尾の自伝にはそのような記述はなく、すぐさま自己について語りはじめていた。ただ、大岡は『少年』に至ってごく簡単にではあるが祖先に関する記述を行っていた。西尾の場合はほぼ完全になかった。

父親に対する感情、そして祖先や一族に関する記述について見てきたが、それらのことはむしろ大きな問題ではなかった。自伝の方法として重要な点は、大岡の自伝に即する形ですでに指摘したとおりである。その点では確かに大岡と和辻の自伝は少なからぬ共通点を持っていた。だが決定的に異なっていたのは、和辻の自伝がほとんど何の資料も用いることなく自己の記憶だけで書いていたという、大岡のまさに避けようとしていた証言としての自伝になっていたこと、もうひとつは大岡のような、自伝を書くことに対する方法意識を持っていなかったことである。和辻にも自伝を書くことについての種々のこだわりというものはあった。だが、大岡のような確固とした方法意識は持っていなかったのである。

四

本論の目的は、大岡昇平の『幼年』『少年』と他の幼少年期を対象とした自伝との比較研究を行なうことであった。だが、それだけではなかった。もうひとつの目的は、自伝を扱う際の記述のあり方を模索することであった。そして、それが自伝というものの記述のあり方とどのように関わっているのかということを検討することであった。

自伝を扱う際の記述のあり方、それは方法といつてもあるいは文体といつてもかまわないが、それを模索してみようと考えたのは、むしろそれまでのあり方に飽き足りないものがあつたからにはかならない。だが、くりかえし指摘してきたように、自伝研究は決定的に蓄積不足であるのが現状である。模索というのは、そのことを

ふまえてのことであった。さらには、自伝を扱う際の記述のあり方は、対象とした自伝の記述のあり方ともおそらくは無関係ではないという予見があったからでもある。いずれにしても、模索というべき段階を出ないのではないかというのが当初からの予測であった。

そして、それはすでに最初に取りあげた和辻哲郎の自伝を扱った際に、はじめに意図していた書き方を少々裏切るといふ形であられることになってしまったのである。それは、自伝の記述にそいながらその生涯（といっても幼少年期のあいだである）を追いかけていくこと、そのことにやや専念しすぎてしまったことである。そのようにはならないように、とはじめから注意していたにもかかわらずである。というのも、それまでの自伝研究に認められるそのような傾向には、かねがね不満を抱いていたからである。特にその傾向が強かったのは佐伯彰一であった。佐伯の論のある種のおもしろさといったことについては先に述べたが、そのこともあるいはひとつのおもしろさだったというべきなのかもしれない。佐伯の論を読めばあたかもその自伝を読んだ気になせられるといった側面がなくもなかったからである。だが、それは同時に退屈さでもあった。自伝の記述をただ追いかけているだけではないか、という印象はやはり消しがたいのである。もっとも、佐伯の論がひとつの自伝に費していた記述の量はそれほど多くはなかった。したがって、それぞれの生涯を丹念に追いかけているわけではなかった。しかし、自伝の記述をただなぞっているだけという側面は強かったのである。ただし、少々気のきいた見立てや感想をさしはさみながらである。

その生涯を丹念に追いかけるという点では、和辻の自伝を扱った本論の方がはなはだしかったであろう。それは江口や西尾の自伝の場合も同様である。和辻の自伝だけでなく、江口や西尾の自伝を扱う際にも同様な傾向を引きずってしまったのである。佐伯の場合に比べれば、それぞれの自伝に費していた本論の記述量ははるかに多かったということがある。また、和辻、江口、西尾のいずれの自伝も、佐伯が扱っていたものの多くよりかなり長かったといったこともある。しかし、大岡の自伝もまた同様に長く、それに費していた記述量も同様に、いやそれ以上に多かった。にもかかわらず、その際には生涯を追いかけていくという書き方はしていなかったのである。であるなら、対象とした自伝の記述そのものちがいが、そのような差を生んだといえるのではなからうか。

一般に、自伝は時間軸にそって記述される。すなわち、生まれたときから現在時までを、時間の経過にしたがって記述することである。もちろん、そのすべてにわ

たって記されるわけでは必ずしもない。生まれてから数年のあいだは記されないことが多く、記されてもあまり多くのことは記されない。また、現在時までに至らず、ある時期までで終えられることも少なくはない。たぶんその最も早い時期で終えられていたものが、これまでに扱ってきた自伝であり、そのように対象を幼少年期に限った自伝も多く存在することはすでに述べたとおりである。だが、いずれも時間軸にそって記されるという点ではほとんど例外はないのである。それは当然のことであるともいえる。しかし、そうでない方法もまた当然あり得たのである。たとえば、現在時からさかのぼって記すという時間軸を逆にたどる方法や、時間軸を用いず何らかの別の構成要素をもとに記述していくといった方法である。だが、そのような自伝はほぼ皆無といってよい。佐伯の認識とは異なり、自伝はかなりの程度パターン化されているのではないかといったのは、そのような意味でもあったのである。

本論で扱った自伝のいずれもが、そしてむしろ大岡の自伝も、基本的には時間軸にそって記されていたことはいうまでもない。だがいずれの場合も、年代的にきっちり書かれていたわけでは必ずしもなかった。特に和辻の場合はそうであった。ほとんど資料らしい資料を使わずに書いていたということもあったであろうが、和辻自身あまりそのことに意を用いていなかったためであろう。そもそも資料を使わずに書いていたのもそのためであったというべきであろう。和辻の資料は要するに自己の記憶だったのであり、その記憶のおもむくままに記されていたという側面が強いのである。そのような記述に、できる限り年代的な秩序を見つけないが、いわば継起的に記そうとしたのが本論の記述であったということができよう。生涯を追いかけていくという記述にやや傾いてしまったのはそのためであったといえるであろう。

ところで、和辻の自伝は単に年代的にきっちりと書かれていなかったというよりは、そもそも年代（年あるいは日付）自体ははっきりと記されることが少なかった。できる限り年代的な秩序を見つけないが、といったのはそのためだが、その数少ない年代の記されたできごとのひとつが神戸への旅行であった。明治の農村暮らしの子供にとって、それはやはり大きな事件だったというべきであろう。和辻はその旅行を、「明治二十八年の五月頃のことであった。」と記していたが、ここで和辻はなぜそういうのかをさまざまに勘案しながら説明していた。そこでは珍しく資料らしきものまで用いていたのである。神戸への旅行が大事件であったにせよ、和辻がなぜここまでこのこだわりを見せていたのかはよくわからない。また、和

辻の説明自体にも疑問な点がないわけではない。だがここで重要なことは、この部分を除いて、このように年代にこだわりつつ年代を特定し得る理由が説明してある箇所はほとんどなかったことである。つまり、和辻は基本的にはそのような書き方をしていないからである。

それに対して、大岡はしばしばそのような説明を行ない、長いあいだ確固とした記憶として抱いていたことからの訂正を余儀なくされてもいたのである。大岡の自伝はさまざまな資料を用いながら、またかつて住んでいた場所を訪れ、土地の人々や知人等の証言を得ながら、基本的にはそのような書かれ方がされていたのである。大岡の自伝は、実際の自己についてそれが明らかになるまでの過程をも含めて記されたものであったといえるであろう。大岡の自伝を扱った際には、生涯を追いかけていくという記述にならなかつたのもそのためであったといえるであろう。

江口の自伝も年代的にきっちり書かれてはいなかったが、和辻とは異なり年(日付)自体ははっきりと記されることが少なくなかった。それは、いわゆる歴史的事件に関する記述が多く、それと関連づけて自己を語るといったやり方を多く取っていたためであろう。だが、大岡のようにそれを明らかにしていく過程が記されていたわけではなかった。そして、特定されている年(日付)にも疑わしいものが少なくなかった。さらには、日付のはっきりとした歴史的事件についても、何の勘ちがいもあやまって記されていたものもあつたのである。そのようなミスが多かつたためでもあろう、江口は以前に書いたことがらを後に訂正するといったことも行ない、再度説明を加えるといったこともしていた。それらは、主に読者による指摘や情報提供によるものであつたが、むしろ訂正されなかつたあやまりも少なくなかった。歴史的事件の日付のあやまりもそのひとつである。それらのあやまりを正しながら年代的な整理をしつつ記したのが、やはり本論の記述であつたということができるであろう。ただ、和辻の場合ほど生涯を追いかけていくという記述に傾いてはいなかつた。あやまりを直すことに少なからぬ言を費していたからであり、また江口の自伝はその三分の一が祖先に関する記述に費されていたからでもあろう。そこでは、祖先の記述に関する問題性をさまざまな観点から考察した。

年代的に最もきっちりと書かれていたのは西尾の自伝であつた。もちろん、やや疑問と思われる点もなくはなかつたが、和辻や江口の自伝に比べればそういう点とは確かである。それは、多くの資料を用いかつ西尾自身つとめてそのように記していたからにはかならない。江口にもむしろそのような意識がなかつたわけではない。だが、西尾に比べればやはり希薄であつたといわざるを得ず、またそれぞれの

年(日付)の特定もずさんさをまぬかれていなかったのである。あるいは、用いていた資料の質的なちがいがいったこともあつたといえるかもしれない。江口も少なからぬ資料を用いていたが、西尾の用いていた資料は江口のとはやや性質を異にしていた。西尾の資料は自身の日記や作文、あるいは当時の雑誌や新聞といった類のものであつた。要するに、日付をはっきりと示してくれる資料だったのである。西尾の自伝の場合は、年代的にある程度きっちりと書かれた記述をやや単調になぞってしまつていた傾向が強かつたことは否めない。ただそれは、西尾の自伝におけるあることがらに関する部分をことさら省いた結果であつたともいえるかもしれない。西尾の自伝はいわゆる状況論という性格を強く持つていたが、そのかなりを占めるがらはもうひとつあつた。中学校時代における先生とのさまざまな交渉を記した部分である。それは中学校時代の記述のかんりの部分を占めていた。だが、そこでは先生に対する否定的な記述が少なくなく、ときにはあからさまな批判のことも記されていた。しかも実名で記されていたのである。省かざるを得なかつたゆえんである。

以上見てきたように、本論の記述のあり方はそれぞれの自伝の記述にかなり左右されていたといえる。自伝の記述にそいながら生涯を追いかけていくという記述に多かれ少なかれなつてしまつたのは、それぞれの自伝の記述のためでもあつたことは否定できないのである。もちろん、そのすべての原因をそのことに負わせることはできないであろう。自伝を扱う方法や文体はまだ模索の段階を出ないことは認めざるを得ない。ただ、大岡の自伝を扱った際にそのような記述にならなかつたのは、大岡昇平における歴史というテーマを論じる上でそれを取りあげ、自己の歴史としての自伝という視点から論じようとしていたためでもあつたろうが、しかしなによりも、大岡の自伝がそれによく耐え得るような実質を持つていたからにはかならない。他の三つの自伝は、やはりそれに耐え得るものではなかつたのである。